

新しい血

桂木 学(原研)

シグマ委員会も設立以来満7年を迎えた。原子力関係のプロジェクトには数年を経ないでうたがの泡と消え去つたものが多いのに比べて、7年間も活動を続けている事だけでも特記するに値しよう。その間委員会内部では組織、活動の重点が年々変つてきたけれども、委員会設立の目的実現に一步步近づいてきている点、その結果として、多くの有用な成果が生み出されつつある点からみると、これに比肩するプロジェクトは数少ないと思われる。最近核データ・センター設立の希望が持たれるのも、第三者によるよい評価のあらわれであろう。このような現状を隆盛と云うならば、委員会はまさにその時を迎えつつあるわけで、筆者も関係者のひとりとして俱によるこびを禁じ得ない。

今年度からは核データの評価活動がようやく本格的な活動期を迎えることになつており、1~2年内には海外諸国の核データ・ファイルと同等、またはそれ以上のファイルが作成されるものと国内外から期待されている。筆者が炉定数作成にたづさわつてきて痛感したことは、炉定数は単に作るというだけでは誰も使つてくれないという事であつた。炉定数概念そのものが、機関、個人によつて少しづつ差があるために、少しでも進んだ概念を作り上げなくてはならないのも1つの理由と思われた。また精度そのものも問題とされよう。しかしこの他に炉定数は、少くとも1つのまとまつたセットとして、それだけ使えば何でも解析できるというように作られていなければならない、さらに、そのセットを用いれば今までよりはよい結果が(少くともあまり悪くない結果)期待できるという保証が必要である。この保証は作成者自身が実証しない限り誰もやつてくれない、特に海外でも使つてもらつて、国際的な評価にもたえるものとするためには、炉定数の概念、セットとしての完備性、精度、使用結果に対する保証が不可欠と思われる。高速炉用定数セット、JAER I-FASTはこの点で従来より幾分進歩がみとめられ、保証については、国際会議でしばしば発表されている。現在ドイツから公開請求が非公式に表明されているのも、上述の4点に関する配慮の結果に過ぎないと考えられる。

核データ・ファイルに関しても、ファイルとしての完備性、ファイルのまとめ方、データの精度それを使うことに対する保証に考慮をはらつて、作成をされるならば、必ずよい反響が期待されよう。実際問題としては、このようにして核データファイルをまとめる事は非常に大きな仕事であり、これをまとめるためには、単に人の数を増して、目的意識を高揚するのみでは不充分と思われる。この仕事に相当して人員の質的構成をバランスよくすることが必要である。特に、何ものをも顧慮しないで一途に目標を達成しようとする若い血と、規則や既成の思考を無視して、異なつた道

を模索し、突進しようとする新しい（異質の）血を含めておく必要がある。幸い核データ研究室には、今後若い人材が増えると期待されるので、若い血に関しては心配ないと考えられる。

しかし、若い血は必ずしも新しい血ではない。新しい血は、組織にその内部から変革を求め荒々しい生命力を与え、創造への新しい思考の様式を培養する重要な因子である。新しい血を拒否することによつて組織は往々その繁栄の頂点において変革を嫌うようになり、枯死した規則に忠実になり、ルーチン化した思考に従つて行動するようになり、やがて衰亡の途をたどることになる。委員会の今日も新しい血と、それを導入することによる擾乱を恐れず、それを馴化したすぐれたリーダーシップと、それを支えた若い血の3者によつて築かれてきた事を忘れてはならないと考える。

7年目を迎えた委員会に、新しい血の要素が少なくなつてきていると感じるのが、単に筆者の杞憂であるならば幸いである。